

大宮まほろ新聞

Vol.021
2024年12月1日発行
OMIYA LIBRARY

図書館の近所さん

～大宮浅間郵便局の巻～

入口で新井局長とまゆっこのツーショットをパチリ。



今回は大宮図書館から徒歩1分の大宮浅間（せんげん）郵便局へやってきました。郵便局長の新井敏史（あらいさとし）さんにお話を伺いました。

大宮浅間郵便局と、新井局長について教えてください。

ここは祖父が開局した郵便局で、来年度開局70周年を迎えます。私は3代目として郵便局を継ぐまでは、テレビCMの制作など、都内で広告業に勤めていました。祖父が仕事をしていたいえば、まだ私が小学生の頃、クーラーがあまり普及していなかった時代の暑い夏に、局内はキンと冷えて涼しかったことです。それから局内にあった給水機が当時は珍しく、新鮮で夢中になっていました。局長になったばかりのとき、祖母から祖父の仕事の様子を聞き、この町場の郵便局をしっかりと引き継いでいこうという気持ちになりました。

お仕事の中でやりがいを感じることは？

郵便局のサービスを通して、人々の生活が少しでも豊かで楽しいものとなるよう努めることが、使命だと思っています。地域の方々の人生に関われることがやりがい입니다。

大変なことはありませんか？

大宮区役所・大宮図書館ができてから、来客数が2倍に増えました。現在、6人という少数精鋭で、限られたスペースと限られた時間の中、たくさんのお客様の対応をしています。週末や月末は特に忙しいですね。

郵便物の流れを教えてください。

この辺りで集めた郵便物はさいたま新都心郵便局から新岩槻の物流拠点に運ばれ、そこから区分機で分けてエリアごとに発送されています。

1年賀状を出す習慣について、感じることありますか？

年賀はがきって、貰えたら嬉しいですよね。手書きでも印刷でも、わざわざその人のことを想って年明けの挨拶をするわけです。年賀状の文化を失くさないためには、年賀状が届いたら嬉しい、という当たり前のことを、若い世代にも広く伝えていけるように、郵便業界もさらにそういったPRができるといいのではと感じます。

1SNSが普及している現代で、従来の手紙文化についてどう感じられますか？

郵便も封筒もそうですし、ペンや万年筆、シール、グスタンプに切手などなど。相手のことを考えながらそれらを選ぶこと、メッセージを書くこと、すべてひらくるめて、手紙文化だと思っています。その人のために時間をかけて手紙を出す。そんな文化を守っていきたいと思います。20年前には「手紙って、ドキドキする。」というキャッチコピーがありました。届くまでの時間が待ち遠しく楽しいものになるような、手紙のそういった部分もいいますね。



紹介した本
「ダンス・ダンス・ダンス」
上・下
村上春樹／著 講談社
1988年



大宮図書館の前にあるヌウのラッピングポスト、かわいいですね！

去年、さいたま市の区制20周年を記念して、郵便局が市に提案して作ったポストです。デザインの下描きは私が務めました。各区にあり、ヌウが帽子を被ったデザインは共通していますが、区ごとに色が違います。ポストの側面はそれぞれの区の名物が描かれています。

大宮の好きなところを教えてください。

氷川神社が好きです。ゴールデンウィークにはセミが、夏の終りにはコオロギが鳴き始めます。季節を楽しめるいい場所です。参道沿いという建物も、私がラフデザインして設計士さんに線を引いてもらいました。製作にあたって代官山や南青山などを訪れて、オシャレな建物をデザインの参考にしました。そこも含めて、氷川参道はお気に入りのスポットです。

おすすめの図書を教えてください。

村上春樹さんの「ダンス・ダンス・ダンス」です。行き詰ったときに読んでいます。20年くらい前、小説を読み始めた時期にたまたま手に取ってそれから大好きになり、村上作品ばかり読んでいます。気に入った表現や文章にマーカーを引きたくなってしまうほど好きです。ヌウポストを探して町巡りしても楽しそうですね。一緒に取材へ行ったまゆっこのは、図書館長へ年賀状を出すぞ、と張り切っていました。皆さんは年賀状、誰に出しますか？

大宮浅間郵便局
埼玉県さいたま市大宮区浅間町2-153-12
TEL 048-1641142 294
郵便窓口 平日9時～17時

わたしのきんえほん

『リスとお月さま』
ゼバスティアン・メッセンモザー／作
松永美穂／訳 コンセル 2007年

この絵本をはじめて読んだ時、思いがけず笑ってしまいました。可笑しくて。繊細なデッサン描写からは想像しなかった嬉しいギャップでした。

リスは自分の家の前に落ちてきたお月さまをみて、しまった！大変、自分がどろぼうだと思われちゃう！と大慌て。そんな思い込みの激しいリスに巻き込まれていく周りの動物たち。大まじめに、どうしようなくかしくちゃ、と必死なのにますます空回りしていく展開。そして、どんどん膨らんでいくリスの妄想。それが、あまりに悲観的すぎて笑ってしまいます。

そんなに心配しなくても大丈夫だよ、だいたいは何とかかなるよーと、リスに言ってあげたくなくて、ふと、リスと自分が重なりました。ちょっと自分と似ているかも。落ち着きなさい！と、子供のころからよく注意されていたのです。驚き、不安、諦念、安堵、動物たちの表情から様々な感情が伝わってきて、可笑しさが増します。表紙裏の見返しからお話が始まることも注目ポイントです。お月さまは、実は…。じっくり繰り返し読みたい絵本です。



大西民子の一首

バス降りて十字路をよぎり来る君よ
夕陽の中のわれに手あげて

『まぼろしの椅子』より

大西博、民子夫婦は、釜石市内で互いの教員をしていた縁で出会いました。博の職場は郊外にあり、民子に逢うためにバスで来ることもありました。待ち合わせをしていたある日、生徒に見つからないように隠れていた民子のもとに、博は大胆にも大きく手を振ってやって来ました。



参考資料
『荷風全集 第一巻・第四巻 永井杜吉／著 岩波書店 1971年』
『大宮の郷土史』第3号 大宮郷土史研究会 編 大宮郷土史研究会 2020年



『永井荷風と
大宮公園』

12月3日は、明治を代表する文豪のひとり、永井荷風の誕生日です。ということで、今回は荷風の作品と大宮との関わりを探ってみました。

まず1つ目の作品は「野心」。明治35年に出版された、荷風のデビュー作です。保守的な家庭に育った老舗の跡取り養子は、家族の反對を振り切り親友と商店を興します。物語の終盤、友人の旅立を祝して設けたささやかな宴席が大宮公園内の旅館でした。その席で養子は、ある衝撃的な電報を受け取りますが、それはぜひ本編を読んでお楽しみください。

2つ目の作品は「飲楽」。荷風が5年の欧米留学から帰国した直後に著した短編の1つです。若かりし頃の情熱的な恋を「長々と」（本文中に登場する表現です）「私」に語る「先生」。大宮が登場するのは2度目の恋の場面です。20歳の「先生」は芸者との心中場所を求める中で、生きた証を残すために大宮公園内の旅館で筆を執ります。そして1篇の自叙伝を懐に大宮公園の松林を出た「先生」は、次第に心変わりしていきます。

荷風は東京に生まれ育ち、作家である巖谷小波（いわやさざなみ）の文学サロン・木曜会へ親友と共に加入したり、麹町（こうじまち）の夜間学校でフランス語を習ったりと、アクティブに過ごしていたようです。大宮を訪れたかは定かではありませんが、荷風が生まれて6年後には大宮停車場が開業し、上野との直通運転が始まりました。もしかしたら荷風も大宮公園まで足を延ばしていたかもしれませんね。



返却参上



サッ
サッ
サッ
今日も
イライラ



近却の際は、
注意くだやいませ。

名言

「阿呆の血のしからしむるところだ」



紹介した本
『有頂天家族』
森美登美彦／著
幻冬舎 2007年

この物語は、京都の下鴨神社の糺（ただす）の森に暮らす、狸の家族をめぐるお話です。主人公も、もちろんふわふわの狸。主人公も、三郎といひます。彼の亡き父は、狸界を束ねる立派な大狸でした。ですが、矢三郎がまだ幼い頃、父は狸鍋となって人間に食べられてしまいました。その偉大な狸の頭領が遺した四匹の子どもの三男に当たるのが、矢三郎です。彼は面白く生きることをモットーに、狸社会だけでなく得意の化け術を活かしながら、人間や天狗を相手に世渡りをし、時には鍋に落ちる危険と隣合わせになりながらも、愉しく日々を過ごしています。

この物語のかげになんてなっているのは、矢三郎の父と母の存在です。他の狸たちからは、偉大な父の血を受け継ぎ損ねた残念な狸、というレッテルを貼られている四兄弟ですが、彼らの両親だけは違います。母にとって、そんな噂はどく吹く風。子どもたちが騒ぎを起こすたびに「それは阿呆の血のしからしむるところだ」と笑っていた父。この言葉に、両親から「やっぱり私たちって親子だね」と言われたときのような、くすぐったい気持ちにさせられるのです。

私が十代の頃、心が弱って部屋に籠りきりの時期がありました。矢三郎の兄の矢二郎が、蛙の姿に化けたまま狸に戻れず、井戸の底に引き籠っている私を父は度々連れ出して、遠方の山へ景色を見に出かけたり、私を車に乗せて夜の街を走らせてくれたり、一緒に富士山に登りました。私にがんばる姿を見せるため、仕事終わりに毎日走る練習をして、東京マラソンに出場して走りぬいた父。いつも心を配って家族みんなのことを見守ってくれていた母。

自分と同じ血が流れているのだから、と笑う父狸の愛情深い言葉は、私の好きな父と母を想わせてくれます。たくさんさんの愛と少しの毛玉に溢れた物語です。



NEXT...『信念』

紹介した本
『My Room
天井から覗く世界のリアル』
John Thackwray／著
ライオン社 2018年



SNSの普及によって私たちは世界と容易に繋がることのできるようになった。しかし、小さな画面の中に広がるその世界は全体のほんの一部分にすぎないし、社会的かつ経済的な条件が揃わなければその恩恵を享受できない。世界中の若者たちの部屋を記録した写真集『My Room』はそれを思い出させてくれる1冊だ。

企画から撮影までを行ったジョンは、世界中をまわるとして「他者を見ることは、あなたを振り返ること」そして「世界が不公平な場所であること」を学んだという。

ここからは世界55カ国、1200人を撮影した全84人の部屋を紹介するが、アングルは全て同じ。天井から広角レンズで撮影、その部屋の主は中央に座って天井を見上げる。語られるエピソードはなるほどと思うものもあるが、衝撃的なものもある。衣服、飾られた小物類、そして部屋の建材そのものからその人やその国の文化の香りが漂ってくるようで、実にリアルだ。素晴らしいのは、それだけが自分の意見をしつかりと語っているところ。こんなふうには語れるだけの信念を持って私たちは生きているだろうか。大金を使っ世界を旅行しても、この本で知るほどには世界を理解できるとは思えない。このような本が世界中に満ち溢れたら。個々が互いを尊重しあえるようになり、そしてその先に世界が争いあえることなくという難題の解決に貢献できるかもしれない。一人の図書館員として、この本を所蔵していることにひそかに誇りを感

読書バトン

第16回
テーマ『香り』

『パディントンのクラシック』1～3

日本コロムビア 1999年

今回は大宮図書館・児童書コーナーよりCDをご紹介します。『パディントンのクラシック』は「おめざめですね」「げんきにあそば」「おやすみなさい」と副題がついた、全3作品のクラシック音楽CDです。朝・昼・夜それぞれの時間帯に合わせて選曲された音楽が、1作品につき14曲ずつ収録されています。誰もが一度は聞いたことのある曲ばかりで、解説書にはそれぞれの曲について簡単な解説が掲載されています。

児童書「パディントン」シリーズの挿絵もちりばめられており、普段クラシックを聴かない方でも手に取りやすく、お子さんと一緒に音楽を楽しめるCDです。赤い帽子に青いダッフルコートがトレードマークのパディントンは、人間の言葉を話し、礼儀正しく親切な、「暗黒の地ペルー」生まれの小さなくまです。ロンドンに暮らすブラウン一家に迎えられ、温かな家族の一員となります。

「パディントン」シリーズは、イギリスのニューベリー生まれの作家、マイケル・ポンドによって1958年に『A Bear Called Paddington』というタイトルで出版されました。現在では150タイトル以上が出版され、40カ国語以上に翻訳、全世界での総発行部数は3,500万部を超えるイギリスを代表する児童書のひとつとなっています。読み物以外にも、絵本やアニメーション、さらには最新のCG技術を駆使して撮影された実写映画にもなり、今もなお世界中で愛されています。

さいたま市図書館の『「心を癒すこの一冊」子ども100選』にも「くまのパディントン」シリーズが選ばれています。好奇心旺盛で、なにかと騒動を起こしてしまうパディントンですが、最後は必ずハッピーエンドでお話が終わります。憎めないかわいらしさやユーモア、そしてパディントンを取り囲む人々の優しさに癒されながら、このCDを聴いてみてはいかがでしょうか。

参考資料
『パディントンベアの世界 愛蔵版』
ジャパネット/編
ジャパネット 2018年
『パディントン』シリーズ
マイケル・ポンド/作
福音館書店、WAVE出版



大宮図書館
ホームページ

twitterではイベントやスタディコーナーの
特人数など大宮図書館の情報を日々つぶやいて
います。ぜひ、フォローしてみてくださいね！
この刊行物の書影画像はBOOKデータASPから
引用しています。



大宮
100景

仕事が終わって、外にでる。陽が落ちるのが早くなってきたと感じる。普段は一向に意識していないが地球は回っているのだと妙に感心して伸びをする。何故か、そのまま家に帰るのが惜しくなり反対方向へ踵を踏む。氷川神社参道を北へ歩く。葉もなく寒々とした樹々を見上げながらゆっくりと歩く。人通りも少なく落ち着いた気分になる。

このあたり、太宰治さんが住まわれていたところかな、と思いながら交差点にぶつかる。そうそう近くにクラフトビールの飲める店があった。きょうきょうとしていたらサインを見つけた。「よし！」と領き足を踏み入れる。この感覚は、図書館で棚をみて偶然、1冊の本を引き抜くときと似ている。

着席し、メニューを眺める。選ぶ楽しみ。待つ楽しみ。口に含めゴクリゴクリと三口。いつもの流儀である。冷たい液体が口蓋にぶつかる。胃を目掛けて食道から流れ落ちていくのが分かる。沁みる。ややあつて、鼻腔から炭酸交じりのビールの香りが抜ける。大手ビールメーカーの香りに慣れた身には新鮮な感覚。複雑な香気。クラフトビールってこれだよなと一人ごちる。

クラフトビールは造り手の想いが強く響く。この店のマスターはテレビを始め各種媒体で拝見しており、一方的に存じ上げている。それらで得た情報を思い出し、目の前のビールを見て、飲んで、勝手にストーリーをつくる。得意の妄想だ。

至福のひと時。こういう時はチビチビやりたい。次はどんなビールに出会えるのか。本と一緒に。いくつになっても出会いはちょっぴりワクワクする。

ほろ酔い気分です。あたりは既に真暗だ。ちゃんと帰れるだろうか。やれやれ。